

書評「遠来の客」米谷ふみ子（新潮文庫こ - 2 2 - 1 ）， ひびき， No.2， 1991

アメリカに自由の新天地を求め絵の勉強にわたった日本人女性が、ユダヤ系アメリカ人と結婚、2児に恵まれるが、長男ケンには重度の障害をもっている子供だ。「遠来の客」には施設に入ったケンが3週間ぶりに初めて帰宅する前後の家族の様子が描写されている。

夫50才妻47才の年老いていく親が子供との共生を望みながらの、対処できなくなっていく場合に施設を考えざるを得ないという現実が記されていて興味深く読める。

子供の初めての帰宅を待ち遠しく思いながら好物のおでんを煮込むところから物語りは始まるが、始終夫の扇情的な言動に妻がいちいち応答して言い争いになり、夫婦が噛み合わない。苛立っている父母とは対照的なケンの落ち着いた様子。月曜日2泊3日の帰宅を終えた息子を施設に送ると夫婦はやっと寛ぎ、自分の言動を冷静に省みることができる。

「ケンはお客さんになったと思えば…」と助言する友人の言葉に妙に納得する母親が文中に現れる件で、一瞬嫌悪感がちらついた。そのことはこちらの精神も肉体も子供との共生において、まだまだ限界に達していないという示唆だったのだろうか。